

- | |
|---|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
B. 円滑な学位授与の促進
②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化 |
|---|

特に効果的であり改善に資した事例について

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

《人社系》

●名古屋大学国際開発研究科

「国際協力型発信能力の育成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

博士課程後期課程における修了要件として単位取得を新たに加えることにした。従来、課程博士号取得のためには、D1、D2、D3 報告会を行い、パスし、論文を提出することが必要であったが、それに加えて、6単位の取得を要件とした。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

D1、D2、D3における中間発表の合格基準設定を行い、博士課程後期課程修了までのロードマップを提示することにより、単位制という制度構築だけで終わらず、その内実の深化を図った。国際実習科目(グローバル・プラクティカム)として、海外実地研究、教育実習、実務研修を設け、単位認定を可能にした。それとともに、早期修了可能性を確保するため、単位取得可能な科目を多数用意した。単位制導入前に入学した学生に対しては、国際実習科目(グローバル・プラクティカム)を履修した場合、その認定証を発行することで単位取得に代わるものとした。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

残念ながら、学位取得率の向上という目に見える形での改善は見られていない。しかし、国際実習科目(グローバル・プラクティカム)に参加した学生の多くは、研究成果を公にしており、研究成果の実はあがっている。昨年までの成果については、成果報告書として公刊した。そして、平成19年度に27名(内、平成18年度参加者13名、平成19年度参加者14名)、平成20年度には16名(内、平成19年度参加者5名、平成20年度参加者11名)のグローバル・プラクティカム修了証を発行した。

《理工農系》

●筑波大学システム情報工学研究科リスク工学専攻

「達成度評価システムによる大学院教育実質化」の事例

(具体的に何を実施したのか)

博士前期課程・後期課程に達成度評価システムを全面的に導入した。これは、教育の質保証を目的として導入したものである。この達成度評価システムはJABEEなどの分野別評価の手法に準じている。達成度評価システムの具体的評価項目としては、一般的達成度評価基準として次の8項目を設定した。

- ①専門基礎、②関連分野基礎、③広い視野、④現実問題の知識、⑤問題設定から解決ま

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

で、⑥プレゼン・コミュニケーション能力、⑦国際的通用性、⑧学術的成果

また、達成度評価システムは、客観性確保の立場からそのシステムの外部評価が不可欠であり、外部機関との連携によって外部評価を実施し、システムの継続的改善を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

各科目に達成度基準を設けて、リスク工学専攻の教育目標への対応付けを行うことで、教育課程と人材養成目的の双方に対応したものとしている。特に、各学生ごとに3～4名の教員により構成される達成度評価委員会を設置し、年間2度の達成度評価委員会を開催し、学生の達成度基準の達成状況をチェックし学生の履修・研究状況を把握するとともに、必要に応じて適切な指導を行うことにより、教育の質保証をより確実なものとすることに重点を置いた対応を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

リスク工学というきわめて学際的色彩の強い分野では、専門的な知見に加えて、リスクに関する広い視野、現実問題の知識、問題設定から解決までのマネジメント能力等が求められるが、達成度評価を実施することによって、これらの能力をバランスよく学修するように指導することが可能となった。また、修了が危ぶまれる学生に対して、事前に指導する機会を確保することになり、教育の質保証の点において、よりよい人材を社会に送り出すことができた。

●広島大学理学研究科地球惑星システム学専攻

「世界レベルのジオエキスパートの養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

厳格な学位審査体制構築の一環として、博士課程前期1年生、後期3年生を対象に、各々の研究中間発表ならびに口頭試問に基づく公開中間審査実施体制（ミッドターム審査）を構築した。これらの中間審査に関するプロセスを明確化し、「ミッドターム演習」として必修授業科目に位置付け、単位化した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

特に博士課程前期学生においては1年次の2月から2年次の6月ごろまで就職活動時期となるため、ミッドターム審査会に至るまでのスケジュールリングが非常に困難である。民間企業等が休みである土日や4月下旬～5月上旬のゴールデンウィークの間に実施するなど毎年工夫をしている。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

ミッドターム審査を実施したことにより、各々の研究の位置づけが明確になり、学位取得に至るまでの補足事項・問題点に対する解決に至るまでの計画が立てやすくなったと思われる。年度末に実施している大学院生へのアンケートによれば、中間時点において現在不足しているものは何か、今後何を充実させていけばよいのかを明瞭に認識することがで

- | |
|---|
| 1. 特に効果的であり改善に資した事例
B. 円滑な学位授与の促進
②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化 |
|---|

きるのでよいシステムであるとの評価を得ている。

《医療系》

●神戸大学医学研究科医科学専攻

「拠点融合型プロフェッショナル臨床医教育」の事例

(具体的に何を実施したのか)

当プログラム履修を希望する学生から、自らテーマを設定して研究を企画するリサーチプロポーザルを科学研究費補助金の書式に準じて提出させ、教務学生委員会を中心とした審査委員会(当該学生の指導教員は除外)にて厳正に審査して採用した。また、年度末に口頭発表による進捗状況報告会を開催し、継続の可否を審査委員会で決定した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

コーディネータ(准教授)を採用し、本プログラムの円滑な運営、大学院生の研究遂行に助言等の指導を行った。プログラムに採用された学生をRAに採用し、経済的支援をするとともに、研究費を支給し、研究の自立性を与えた。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

自立的研究遂行能力が養成された。

《非公表プログラムの事例》

●事例1

(具体的に何を実施したのか)

学位取得の目標となる研究の質・量を明示化した。特に、学位申請論文のイメージを明確化するために「博士論文の目安」(64頁の冊子)を作成し、新学期ごとに配布した。また、この内容を4専修による合同授業(特殊講義)(半期2単位)において強調し、理解を促した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

「学位取得に必要な実証研究の質と量を、学生が明確なイメージをもって把握できていない。」という問題を解決するために、「博士論文の目安」を作成した。そのために、24人の教員が、それぞれA4、1-2枚にわたり「学位取得に必要なと思われる研究の質と量」についてまとめた。このような目安について教員間で議論したのはこれが初めてであり、教員により基準が大きく異なることが明らかになった。そのため、明示化することへの躊躇もあり、また、基準を統一することは困難であったため、例示にとどめたが、大きな第一歩であった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例

B. 円滑な学位授与の促進

②厳格な成績基準と評価基準の設定や学位授与プロセスの明確化

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

本プログラムの目標の第一は、学位取得率を上げることであった。

①修士については、高い学位取得率、年限内取得率を維持することができた。これは他専攻と比較すると、より明確である。具体的には、18、19、20、21年度の修士号取得率は、80、114、82、91%（他専攻は112、77、82、82%）、年限内取得率は65、91、77、77%（他専攻は83、60、59、51%）である。低下は少なく、また、他専攻に比べ高い水準を保っている。

②博士については、学位取得率が向上している。18、19、20、21年度の博士号取得率は28、53、38、157%（他専攻では27、43、36、49%）、年限内取得率は11、20、0、14%（他専攻は14、11、11、8%）であり、年次とともに、28%から157%へと大きく増加した。